





先月の十月十三日と十四日に、宮城学院女子大学の大学祭が開催されました。今年は「華」をテーマに、各学科、サークルなどが各々の特色を生かした店や展示を出展し、行事を盛り上げました。私たち日本文学会は「百人一首」を今年の題材として取り上げました。同じ日本文学部の学生はもちろんのこと、他学科の学生や一般の方々にも百人一首に親しんでもらうことを目標として、百人一首についての展示とお休み処を提供しました。

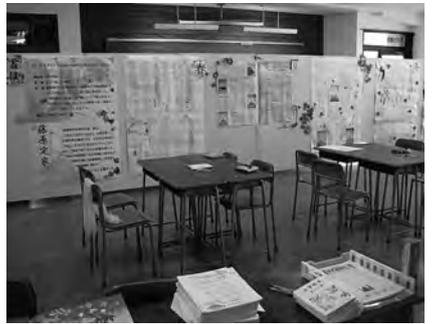
大学祭前日の十二日に行われた仮装パレードでは、各サークルの一年生や有志の団体が、様々な仮装で仙台市内を練り歩きました。各団体のアイデアや技術が光る中、私たち日本文学会は百人一首というテーマに沿って、四季折々の柄の法被と、十二単をイメージした衣装を身に着けてパレードに参加しました。特にこだわったのは、背部分に百人一首の歌が描かれた、各自手作りの法被です。市民の方々の暖かい応援のおかげもあり、パレードは終始順調に進みました。歩いてはいると、「頑張れ先輩」と声援を送ってください。この学校の卒業生の方に出会うなど、改めて人の暖かさを実感することができました。残念ながら仮装のランキングに入賞することはできませんでしたが、パレードに参加した全員が、人の優しさに触れることができたのではないでしょう。

大学祭当日は、食品、物品の売店や学科、サークルの展示、そして参加型企画などが私たちを楽しませてくれました。売っていた食品、物品はどれもクオリティが高く、普通の店で売っていてもおかしくないものばかりでした。調理関係の店は、料理サークルやゼミの団体など、食品を扱うことに長けている食品栄養学科の学生たちが多く出店していました。また物販では、ハンドメイド同好会

など、手作りとは思えない出来栄の商品が売られていたことにも驚きました。作品展示は、各団体が自分たちの技術、知識のすべてを出し切りたのも見ごたえのあるものでした。特に印象深かったのは、生活文化デザイン学科の学生が制作した模型です。作りの正確さはもちろんのこと、細部にまで細やかに作ってある模型を見たときは、鳥肌が立つほど見事でした。参加型企画では、心理行動科学科の提供した「ココロミル」など、それぞれの団体の特色を生かした企画が多かったようです。このように各団体が工夫を凝らした企画を展開していた中、私たち日本文学会は、展示とお休み処を提供しました。展示は、百人一首の歴史遊び方のついでに展示と雑歌についての歌の特徵についてまとめた展示の、合計六つの班に分かれて展示を制作しました。また、作った展示を活用した参加型企画「百人一首クイズ」も行いました。クイズの答えはすべて展示の中に書かれているので、百人一首について全く知識のない人でも楽しめるように工夫をしました。全問正解者には工夫としたお菓子を景品として渡していたので、小さい子も積極的に参加してくれました。また「あなたが思う雅ポイント」というコーナーを設置し、訪れた方に自由に雅ポイントを書いてもらいました。書いてもらった雅ポイントは、十月という月もあり「落ち葉を踏んだとき」など秋らしいものが多く、それを読んだ私たちが趣深い気持ちにしてくれました。同じ学科の学生から一般客まで多くの人が訪れました。特に一般の方は、最初はクイズに苦戦しつつも、真剣に展示を見ながら解いてくれた方が多く、展示やクイズを作った側からはとても嬉しいことでした。このように、今年も多くの店が出店し、各々が来てくださった一般の方々を楽しませるこ

とができました。

後夜祭では、大学祭実行委員によるゲーム大会や、俳優の松坂桃李さんによるトークショーなど多くの催しが行われ、昼間は忙しさであり楽しめなかつた学生も十分に大学祭を満喫することができました。ゲーム大会では、映画の鑑賞券をはじめとする豪華な商品をかけて、小さな子どもから年配の方まで、多くの参加者がピンゴやロシアンゲームに挑戦し、大いに盛り上がりました。そんな後夜祭の最後の締めは、何発もの打ち上げ花火です。曲に合わせて上がる花火は、準備に追われた日々や訪れた人を喜ばそうと必死で努力した当日のことを私たちに思い出させ、喜びや安堵と同時に少し感慨深い気持ちにさせられました。楽しみにしていた大学祭でしたが、終わるのはあつという間に感じました。しかしその二日間という短い間にも、店巡りなどを楽しくんだだけではなく、一般の方々や他校の生徒など、人との出会い、繋がりの大切さを改めて感じることもできたイベントだったのではないかと思います。私たちは来年、再来年とこの学校の大学祭をもっと素晴らしいものにしていけるように努力しなければならぬと感じました。



「冷たい校舎の時は止まる」  
著者/辻村深月  
出版社/講談社  
定価/八一九円(税別)

雪降るある日、いつも通り学校に登校した八人の高校生。始業時間になっても八人以外、誰一人として来ない。昇降口は開かず他に脱出方法はないかと探すが、担任教師の机にある写真立てに気がつく。それは二ヶ月前の学園祭の時に八人で撮った写真だった。だが、写真の中には一人足らず七人前の学園祭に同級生が自殺したことを思い出した。だが、誰一人その同級生の名前や顔が思い出せない。そして、あることに気が付く。時計が五時五三分で止まっていた。それは、同級生が自殺した時間だった。なぜ彼らは自殺した同級生のことを思い出すが、それができないのか、その自殺者は誰なのだろうか。

思春期の時によくある悩みや思いが、一人一人丁寧に描かれていく。思春期を通り過ぎた私たちに、登場人物の思いに共感したり、思春期の時の悩みが懐かしく思ったりする場面があるのではないだろうか。

一つ一つ丁寧に謎が解かれていく。どんな本の世界に引き込まれ、続きが気になるところだ。ミス터리小説が好きという方にはぜひ読んでほしい。もちろんミス터리小説が好きではないという方にも読んでほしい。

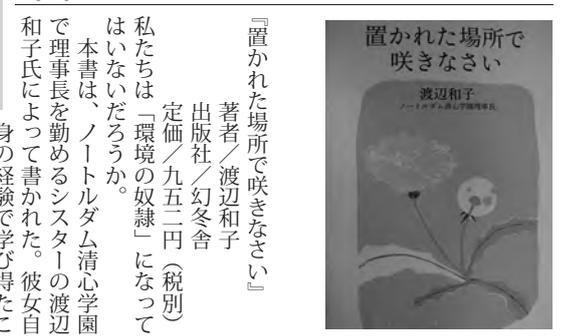
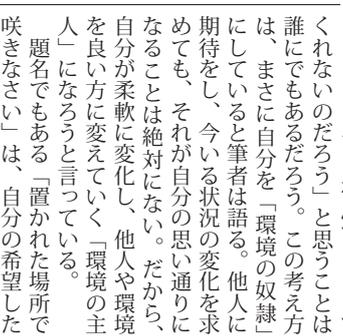
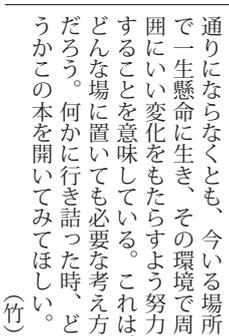


「置かれた場所で咲きなさい」  
著者/渡辺和子  
出版社/幻冬舎  
定価/九五二円(税別)

私たちは「環境の奴隷」になつてはいないだろうか。

本書は、ノートルダム清心学園で理事長を務めるシスターの渡辺和子氏によって書かれた。彼女自身の経験で学んだことから、「豊かな生き方を提示している。冒頭で述べた言葉は、多くの人に当てはまるだろう。環境の奴隷とは、置かれた場に不満を持ち、他人の出方で一喜一憂することである。「なんでこうしてくれないのだろう」と思うことは誰にでもあるだろう。この考え方は、まさに自分を「環境の奴隷」にしていると筆者は語る。他人に期待をし、今いる状況の変化を求め、それが自分の思い通りになることは絶対ない。だから、自分が柔軟に変化し、他人や環境を良い方に変えていく「環境の主人」になろうと言っている。

題名でもある「置かれた場所で咲きなさい」は、自分の希望した通りにならなくとも、今いる場所で一生懸命に生き、その環境で周囲にいい変化をもたらすよう努力することを意味している。これはどんな場に置いても必要な考え方だろう。何かに行き詰った時、どうかこの本を開いてみてほしい。



# 歌舞伎鑑賞 義経千本桜

仙台で松竹大歌舞伎による「義経千本桜」が七月十九日に東京エレクトロンホール宮城で公演されました。歌舞伎の演目で有名な義経千本桜三幕の鳥居前・道行初音旅・川連法眼館の公演です。歌舞伎は出演する方によって演出が少しずつ違うので、同じ演目でも違った楽しみが味わえます。一幕ごとに演者が変わることも大きな魅力で、それぞれのキャラクターの味が伝わってきます。足しげく通っている人は自分好みの義経や静が決まっていることもあるそうです。

この公演で見た三幕は源義経と愛妾の静御前に託された「初音の鼓」をめぐる話で、真っ白な狐が出てくることで有名な狐ではないでしょうか。兄に追われて逃げている義経に、恋仲である女武将静は追いかけて、一併に連れて行ってほしいと願いますが、「旅は危険だ。私の代わりにこれを」と義経は初音の鼓を静に託して置いていきます。そこに敵方が現れて、あわやという所に忠信がどこからか駆けつけて静と一緒に義経を追いかけてきます。道中、静と忠信は疲れながらも義経を思い、舞を踊りながら歌を詠んだり、支え合っ

過ごします。しかし、その忠信は鼓の皮にされた雌雄の狐の間に生まれた子狐で、忠信に化けていたのです。

鳥居前では、静の好いた男性と一緒にいたい女心と、義経の大切な女性を危険な目には合わせられない男心のぶつかりが描かれ、現代に通じるすれ違いの切なさを味わいました。男性が演じているのにもかかわらず静御前の可憐な少女のような仕草に恋愛ドラマを見ているようなきもきもした気持ちを覚えた人も多いのではないのでしょうか。一転して道行初音旅では、また離れてしまった義経を思ふ大人の女性のしなやかな愛情を含んだ舞に、色気にあてられたため息をこぼすような一面が見られました。道行初音旅は、ついに狐の正体と狐の境遇に自分を重ねる義経と不思議な縁による、結末が迎えられる。道行初音旅は歴史的背景を知ると、より感情移入することができるので、少し違った見方ができるでしょう。

現代でも大衆に好まれている歌舞伎は身近な町民の姿が描かれることが多く、歴史の英雄が描かれることその人情にせまり、丁寧に人物像にズームアップされています。長く愛されている理由は多くの方が感情移入でき、身近に感じられるからかもしれません。最近では女性からの人気に応えて、パンフレットと一緒に歌舞伎役者の写真集も販売しているそうです。私たちは授業の一環として歌舞伎を観る機会がありますが、そんな人々も日本に続く文化に触れるきっかけがあるのは、柔軟にその時代に合わせた歌舞伎ならではないかと思えます。歌舞伎はテレビでも扱われることが多いですが、舞台を観ると空気の变化や役者の機微を感じる事ができるので、劇場に足を運び、生の芸術を感じていただきたいです。

(阿)



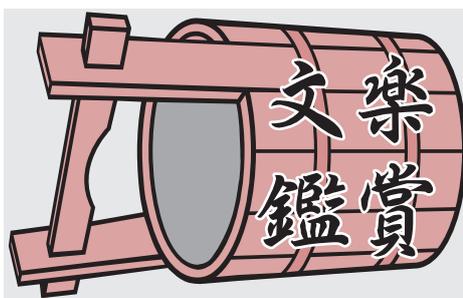
九月十九日、仙台市青年文化センターにて行われた「能への誘い」の平家の武将を観てきました。「能への誘い」は「観て能を観る方にも能を身近に感じていただく」をテーマにプログラムされており、開演の前に「能の解説」・「囃子の解説」と、舞台では見ることのできない「能装束の着付け」を実演していただきました。この日出演していた喜多流の佐藤寛泰さんは六月に宮城学院女子大学にお越しになり、能についての講演してくださった方です。講演では清経の謡いの稽古をつけてもらい、生徒が実際に装束を着るとい、事前の講義がありました。

観賞した「能への誘い」は、随所に能をより知ることが出来るポイントが多くありました。幕がある前に、歴史から紐解いた「能の解説」がありました。能演者独特の関西訛りで話される能の世界は、講義とはまた違った雰囲気があり、真剣に聞き入っている姿がよく見られました。次に「囃子の解説」がありました。囃子は実際に地謡の方々が使う笛、小鼓、大鼓の組み立て方から鳴らし方、雰囲気の違いなどを細かく教えて下さる佐藤さんを中心にした「能装束の着付け」の実演がありました。ここでは物語を見るうえでポイントでもある着物の柄、扇子の絵、烏帽子の向きなどの意味を教えていただきました。演者が能面と向き合い、集中して行う着付けから、面をつけるところまで幕がある前の舞台で見せていただくという貴重な体験は、なかなか巡り合うものではありません。

(阿)

一〇月十七日に、電力ホールにて人形浄瑠璃文楽の仙台公演を鑑賞しました。屋の部では「桂川連理の柵」・「六角堂の段」・「帯屋の段」・「道行鷹の桂川」・夜の部では「一人禿」・「義経千本桜」すしやの段」が上演されました。今回は多くの学生が観た夜の部を詳しくお伝えします。

初めに大まかな解説のあと、「一人禿」が上演されました。京の遊郭島原の禿二人が遊ぶ、愛らしい姿を描いた景事で、昭和十六年(一九四二)、大阪の四ツ橋文楽座で初演された「春げしき双草紙」の下の巻にあります。「禿」というのは、おかつば頭の女の子が本来の意味ですが、時代とともに遊郭に住み込む幼女のことを禿というようになったそうです。舞台には可愛い赤い着物と派手な髪飾りをした女の子の人形が登場しました。三味線の音色とともに入形は羽根をしたり手鞠をつきあつたりと楽しそうな様子にとても癒されました。上演前には、間近でこの人形を見る機会が設けられていたので、ご覧になった方は親近感が湧いたかもしれません。休憩をはさみ、「義経千本桜」すしやの段」が上演されました。「義経千本桜」は、「菅原伝授手習鑑」・「仮名手本忠臣蔵」とともに浄瑠璃三大傑作と称される有名な作品です。平家を滅ぼした後、兄頼朝に追われる身となった義経に実は生きていた家の武将たちを結ませた五段の時代物で、今回はその中の三段目に当たる「すしやの段」でした。「すしやの段」は、吉野名物の釣瓶鮓を御所にも献上



した、今でも有名な鮓屋を舞台とじています。平維盛が生きていて高野山へ入つたとの噂を聞き、家来の小金吾に伴われ、高野山へ一行は向います。やがて吉野の下山村に到着し茶屋で休憩しました。そこに男が一体みして立ち去ると小金吾の荷物がすり替えられてしまっています。男はすぐに取り違えに気付き謝罪しました。しかし、荷物のお金がなくなつたと騒ぎ、お金をゆすり上げました。いがみの権太は、釣瓶鮓屋「弥助」の弥左衛門の息子で勘当同然の身という悪者でした。一方小金吾は、日没後追手に囲まれ、御台所と若君を逃がして絶命しました。その遺体を見つけた弥左衛門は、ある理由で首を切つて包み、家へと急ぎます。ここから舞台のすしやの段です。

導入の三味線の激しい調べが興味をグッと煽り立て物語に引き込まれていきました。権太の入形はとても大きく、目がギョツとして小さい子どもなら怖がりそうなおもです。しかし、権太の行動や言動は面白く、権太の真意が分かるかと笑ってしまつたことに申し訳なくなつてしまいました。その時の太夫の語りより権太の気持ち伝わって胸に残りました。太夫と三味線と人形という他の国ではあまりない舞台設定であり、江戸時代から伝わる伝統文化に触れる機会なかなかないと思えます。権太の真意が気になる人や興味を持った人は是非生で観に行くといいかもれません。

(梨)

# 日本語学校見学



十月三十一日、日本語教育演習Ⅱの授業の一環として、仙台ランゲージスクール内にある日本語学校を訪れました。二年生は初めて日本語学校に来た人がほとんどで、少し緊張した面持ちの学生が多かったです。私も初めてだったので、何を話したらいいのか、上手く話ができるだろうかと少し不安でした。

それぞれの机に、日本語学校の生徒一人と日本文学部の学生が一人か二人ずつ座り、自由に会話をしていきます。四〇分ほどしたら相手を交えて会話をしました。

初めに、私は二歳のベトナム出身の男性と話をしました。まずお互いに簡単な自己紹介をします。そこで、私の名前がよく聞き取れなかったようで、紙に書いてほしいと言われました。また、私も彼の名前の部分が聞き取りにくかったため、名前をカタカナで書いてもらいました。

紙に名前を書くときに、自己紹介のとき自分の名前を少し早口で言ってしまったのだと、気が付きました。日本人同士なら、多少早く喋っても、名前ならだいたい予想がつくでしょう。しかし、私も彼の名前が聞き取りにくかったよう

に、名前の予想がつきにくいという聞き取りづらかったのだと思います。その後は、日本語を一年以上勉強しているようで、会話はスムーズに進んでいきました。不安だった気持ちがだんだん消えていき、お互いに質問し合い、会話を進めていきました。趣味のことやアルバイトをしていること、友達とは何をして遊ぶのかなど、いろいろな話題が挙がりました。

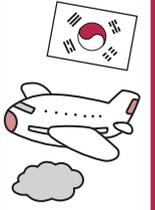
会話の中で彼は、時々間違った表現や言い方をすることがありました。猫を一個と数えていたので一匹二匹と数えるのだと私が教えたので、彼が自分で気づいて言い直したりしました。ただ会話をしている中、相手にとっては学ぶことが多いのだと実感しました。

次に二八歳のイタリヤ出身の男性と話をしました。彼も一年以上日本語を習っていると言っていました。自己紹介をする際には、はっきり丁寧な名前を言うことを心がけました。その後は同じように質問をし合い、会話を進めていきました。

その中で彼は、この学校には中国人やベトナム人が多くから、日本語だけでなく中国語やベトナム語も覚えたいとみんなの会話に入っていけないと言っていました。冗談のように笑ってこのことを話してくれましたが、日本語を学ぶ人の母語の種類に偏りがあるのだと感じ、彼のように同じ日本語を学ぶ人たちが仲良くならないという現状があるのだと思いました。話はスムーズに進んでいきましたが、同じくたまに言い間違いがありました。店員を「ミゼン」と言っていた時は読み方の間違いもあるのだと感じました。

今回は初めて外国の方と長い時間話をしました。話す速さや内容など、普段は考えずに会話をしている事に気づき、日本語学習者の気持ちや考えなど、たくさん学ぶことができました。(手)

# 韓国研修



九月一〇日から一六日まで六泊七日にわたって、日本文学部の日本語教育を専攻している学生を対象とした韓国研修旅行が行われました。今回の研修に参加したのは二年生一〇名、三年生一五名の計二五名です。

一日目は仙台空港に集合し、ソウル市内の仁川空港へと向かいました。空港に到着後、新村市内にあるホテルにチェックインをし、夕食はブルゴギを食べ、二日目からは始まる研修に備えました。

二日目は忠南大学を訪れ、日語日文科の授業を見学し、韓国の文化講座・体験に参加しました。授業見学では宮城県について調べたことを日本語で発表してくれまし

た。とても詳しく調べられていて中には私たちが知らなかったことも含まれていました。宮城学院女子大学の学生に質問をする場面では仙台の名産品である牛タンについては質問や宮城県の鳴子町について質問がありました。文化体験では忠南大学の院生の方に教わりながら、韓国伝統衣装を着た人形作りを体験することができました。どの学生も一生懸命取り組んで自分の人形を作り上げていました。

三日目は、大真大学の学生と皆さそと一緒に各班に分かれて街を歩き、その後訪れた場所について全体発表を行いました。韓服の試着体験を行ったり、韓国の郷土

料理を食べたり各自のテーマに沿って地下鉄やバスを利用しながら街を回っていた様子が伺えました。四日目は、徳沼高等学校という韓国の高校を訪れました。日本語の比較表現の授業を見学しました。ポタンを押すと日本語の音が出るなど、工夫を取り入れた授業が行われていると感じました。昼食後、韓国の「ゴンギ」という遊びを体験しました。なかなか難しく、苦戦する学生が多かったようでした。徳沼高等学校から帰ってきた後、二・三年生の中で二組に分かれて日本語講座の授業に参加してきました。中級会話の授業では、学習者の日本語能力の高さに圧倒されてしまいました。

五日目は戦争記念館とNソウルタワーの見学がありました。その後、トロクハウスにて韓国語学習と韓服の試着体験を行いました。また午後には弘益大の学生の方との交流もあり、日本語初級の

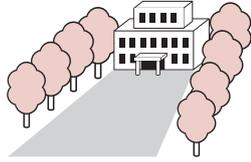
学習者の方に対してわかりやすい日本語を伝える事の難しさを実感しました。

六日目の自由行動では、それぞれが有意義な時間を過ごし、韓国で過ごす最後の一日を満喫しました。

今回の研修で相手に理解してもらえるように話すことがいかに大切であるのかを学びました。この研修での経験を無駄にせず、これからの日本語教育の学習により一層励んでいきたいと思えます。(麻)



# 博物館 実習記



八月二八日から九月一日にかけて、仙台文学館での館務実習がありました。実習に近づくにつれて緊張感が増してきましたが、学芸員や職員の方々が温かく迎えて下さり、緊張が和らぎました。

館務実習は、展示の撤収作業、書庫整理、資料概略や企画展示イベントについての講義や企画書に関するディスカッションなどです。撤収作業は子ども文学館から本や机、イーゼルなどの物品を選び出しました。物品は重いものが多かったのですが、他大学の実習生と協力して作業に当たりました。

来館者の中には、台原森林公園を通ってくる方もいます。そのため仙台文学館の館外に出て、台原駅まで台原森林公園を通って行きま

したが、他のミュージアムで開催していた展示会のリーフレットの内容が、実際の歩くことで様々な気づきがあり、来館者の立場になって考えてみることの大切さを学びました。

八月二八日から九月一日にかけて、仙台文学館での館務実習がありました。実習に近づくにつれて緊張感が増してきましたが、学芸員や職員の方々が温かく迎えて下さり、緊張が和らぎました。

館務実習は、展示の撤収作業、書庫整理、資料概略や企画展示イベントについての講義や企画書に関するディスカッションなどです。撤収作業は子ども文学館から本や机、イーゼルなどの物品を選び出しました。物品は重いものが多かったのですが、他大学の実習生と協力して作業に当たりました。

来館者の中には、台原森林公園を通ってくる方もいます。そのため仙台文学館の館外に出て、台原駅まで台原森林公園を通って行きま

したが、他のミュージアムで開催していた展示会のリーフレットの内容が、実際の歩くことで様々な気づきがあり、来館者の立場になって考えてみることの大切さを学びました。

企画展示についての講義では、展示がどのように決定するのか、展示関連のイベントはどういったものなのかなど、仙台文学館で実際にやってきたイベントの例を踏まえて教えていただきました。

実習生それぞれが考えた企画書について、ディスカッションもしました。自分が考えた企画について、自分が見てもらうことで発見があり、良い刺激となりました。書架整理では、書架の操作方法や

再利用作業を行いました。職員には地道で根気のいる作業が必要になってくることを実感しました。職員の方々は仙台文学館という名を背負い、自覚を持って、それぞれが協力して作業にあたっているのです。

資料概略では、紙の資料を扱うときの注意点を説明されました。仙台文学館では、手袋だと自分がどれくらい強さで扱っているかわからないため紙の資料は素手で扱うのだそうです。

企画展示についての講義では、展示がどのように決定するのか、展示関連のイベントはどういったものなのかなど、仙台文学館で実際にやってきたイベントの例を踏まえて教えていただきました。

実習生それぞれが考えた企画書について、ディスカッションもしました。自分が考えた企画について、自分が見てもらうことで発見があり、良い刺激となりました。書架整理では、書架の操作方法や

分類の仕方を教わり、他大学の実習生と協力し合いながら整理をしました。

企画展示室の設営の作業では、次回の企画展に向けて椅子や演具の撤去、のぞきケースの移動などを行いました。その中で、学芸員の方から資料を照らす光量について教えていただきました。お客様にとって資料を観るとき、光量が暗すぎると観にくいのですが、資料に当てる光は決められた量でなければならぬのです。学芸員は資料を守らなければならぬので、お客様の要望に応えることも大切ですが、必ずしも応えることはできない難しさがあることを知りました。

実習を通して学芸員の方から直接貴重なお話を多く聞くことができました。また「文学館を通して豊かな人生を」という文学館の目的に通じている様々な仕事があることがわかりました。この経験を今後にも活かしていきたいです。(渡)

# 岩淵奈緒さん 講演会

二〇一二年七月一三日。岩淵奈緒さんの講演会が行われました。今回は「図書館司書の理想と現実」という題目で講演をしていただきました。岩淵さんは宮城学院女子大学日本文学科を卒業し、県立図書館で三年間働いていた経験のある方です。

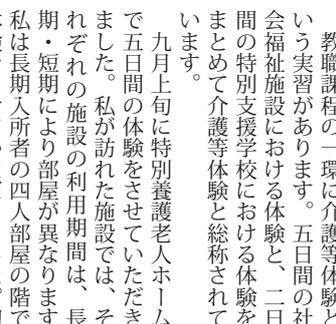
まず雇用形態の割合と傾向についてお話をしてくださいました。最近の図書館の傾向としては、専任職員の募集が減ってきているそうです。宮城県や仙台市の公共図書館では数年前から正規採用はしていないので、正規採用を狙うなら県外や市外が良いとおっしゃっていました。他に司書になる方法としては、教師になって学校図書館に所属する方法があります。しかしそれは教師と司書の兼任になってしまふ場合を覚悟しておかなければなりません。いずれにせよ、司書という職業は狭き門で、諦めない気持ちと忍耐力、そして

実用的な知識も備えていなければなりません。具体的には、得意なものを知り尽くさずにはおけません。外の知識も身につけること、外国人への対応のために英語を話せること、第二外国語の本の分類のためにハンダール語などの知識があることなどが挙げられます。図書館司書には偏った知識よりも幅広く網羅した知識を要求されるため、苦学分野をなくす努力が必要です。

それから図書館司書として働いた経験も話してくださいました。たくさんある中で印象深かったのは、どの本に何が配架されているのかしっかりと把握しておくということです。検索しなくては教えることができないということになる。「司書はいくつもの役割を兼ねている」といふことになってしまふため、プロ意識を持って取り組んでほしいとおっしゃっていました。

他にも選書の仕方や著作権について、ここでは書ききれないほどの濃厚な講演をしてくださいました。ネットを調べるだけではわからない経験者の生の声は、参加した皆さんにとって、司書という目標が明確になるものだったのでないでしょうか。

最後に、貴重な講演をしてくださった岩淵奈緒さんに深く感謝申し上げます。



九月月上旬に特別養護老人ホームで五日間の体験をさせていただきました。私の施設は施設では、それぞれに施設の利用期間は、長期・短期により部屋が異なります。私は長期入所者の四人部屋の階で体験をさせていただきました。初日のオリエンテーションでは「福祉とは何か」をじっくりと考えることになりました。福祉とは相手のためを思うことだと大まかなイメージが共有されました。音のある生活が当たり前に、手話なしで会話する方が障がいのある人にとって不思議な感覚なのかもしれません。今回の体験を通してそれが実感できてよかったです。二日間という短い間でしたが、子どもたちは元気いっぱい出て来てくれました。介護等体験では、七歳から一〇三歳という年齢の幅広い様々な方に触れることが出来ました。いろいろなことを学ぶ中で、特にどんな方に対してもコミュニケーションを取ることは難しいと思います。しかし、時が経つにつれて打ち解けて楽しくなってくるのが分かりました。この体験を教育実習や今後の人生に活かしていきたいです。

# 文学旅行

一月三日に「再発見！山形の魅力」をテーマに文学旅行が催されました。今回は山形県天童市で三つの博物館を見学しました。秋風が立つなか、楽しく山形を堪能することができました。

初めに天童市美術館の企画展示「島田ゆか&ユリア・ヴォリ絵本原画展」を見学しました。カナダ在住の島田ゆかさんが描いた絵本『パムとケロ』シリーズの原画が物語に沿って並べられています。細部にまでこだわって描かれている原画は何度見ても飽きません。なにより、表情豊かで可愛らしいキャラクターが魅力的でした。

次に、創業一〇〇年を越す老舗

の手打ちそば屋「水車生そば」で昼食を食べました。生そばは、つなぎを使用していません。口触りが堅く、噛むほどにそばの風味が増し、とてもおいしかったです。昼食後、そば屋の向かいにある広重美術館へ向かいました。ここでは、江戸時代の浮世絵師、歌川広重が天童藩のために書いた作品「天童広重」が展示されています。

今回は、江戸の暮らしをテーマにした「お江戸ライフスタイル」が企画展示されており、江戸時代の人々と環境の繋がりについて学ぶことが出来ました。また、ラウンジでは広重の作品がご覧いただける工程をビデオで説明していました。「天童広重」は、元は二〇〇から

三〇〇幅ほど描かれたとされていますが、天童市郊外で確認できる数は一九幅と少なくて、貴重な作品となっています。

最後に、出羽桜美術館へ向かいました。この美術館は、雰囲気は正反対の二つの館に分かれています。本館は美しい伝統的な日本建築であり、一方、分館は異国風の軒家で構成されていました。本館では、古韓国の陶磁や工芸品を主として展示しています。今回は洋画家小杉小二郎展を行っています。

小杉さんは、パリを拠点に活動しています。作品は、キリスト教を題材にしたものが多数ありました。しかし、どこか寂しげで日本的な無常観が含まれているため、和風の部屋とマッチしてしましました。また、細かい細工が施されたものや、シンプルなものなど、様々な急須が見物者を楽しませてくれました。別館では、「さすらい」というテーマで斎藤真一心の美術館という企画が行われていました。

この美術館は、斎藤さんの使用していたアトリエをそのまま残してあります。彼は東北や北陸を旅し、盲目の旅芸人「瞽女」に関する作品を多数描きました。作品はどれも美しく、一つ一つの絵をじっくりと見ている参加者が多く見受けられました。

今回は、隣山形の魅力を再度確認した旅となりました。皆さんも、自分の知らない土地で、歴史ある日本の文学や芸術に親しんでみてはいかがでしょうか。(竹)

九月月上旬に特別養護老人ホームで五日間の体験をさせていただきました。私の施設は施設では、それぞれに施設の利用期間は、長期・短期により部屋が異なります。私は長期入所者の四人部屋の階で体験をさせていただきました。初日のオリエンテーションでは「福祉とは何か」をじっくりと考えることになりました。福祉とは相手のためを思うことだと大まかなイメージが共有されました。音のある生活が当たり前に、手話なしで会話する方が障がいのある人にとって不思議な感覚なのかもしれません。今回の体験を通してそれが実感できてよかったです。二日間という短い間でしたが、子どもたちは元気いっぱい出て来てくれました。介護等体験では、七歳から一〇三歳という年齢の幅広い様々な方に触れることが出来ました。いろいろなことを学ぶ中で、特にどんな方に対してもコミュニケーションを取ることは難しいと思います。しかし、時が経つにつれて打ち解けて楽しくなってくるのが分かりました。この体験を教育実習や今後の人生に活かしていきたいです。

など助け合って生活している。とても感謝している。とおっしゃっているのだなと感じました。五日間の体験を通して、何度も「ありがとう」と頭を下げてお礼を言われることが多く、とても驚きました。年齢など関係なく、礼儀を持って頭を下げて感謝する姿勢は見習いたいと思いました。

次に、九月下旬に二日間の特別支援学校の体験をさせていただきました。耳に障がいのある子どもたちが通う学校でしたので、生徒は耳が聞こえません。そのため大人しいという印象があると思いますが、予想とは違って、子どもたちは積極的に自分のやりたいことを。どう接したらいいか不安に思っていました。その積極的な姿勢に不安がなくなりました。また、先生も児童も手話を通してコミュニケーションを取っています。私は手話がわからないため、手話のやりとりを見ながら内緒話をしていく感じだと思いました。先生による、その感覚は社会に出た障がいのある人の感覚と同じだとおっしゃっていました。音のある生活が当たり前に、手話なしで会話する方が障がいのある人にとって不思議な感覚なのかもしれません。今回の体験を通してそれが実感できてよかったです。二日間という短い間でしたが、子どもたちは元気いっぱい出て来てくれました。介護等体験では、七歳から一〇三歳という年齢の幅広い様々な方に触れることが出来ました。いろいろなことを学ぶ中で、特にどんな方に対してもコミュニケーションを取ることは難しいと思います。しかし、時が経つにつれて打ち解けて楽しくなってくるのが分かりました。この体験を教育実習や今後の人生に活かしていきたいです。

